

良心と共に生きる

水谷 誠	同志社大学キリスト教文化センター所長 同志社大学神学部教授 日本キリスト教団正教師
奨励者紹介〔みずたに・まこと〕	〔研究テーマ〕 近代プロテスタント神学思想史。キリスト教と日本の文化、社会

設立の旨意

本日は「良心と共に生きる」というテーマでお話しします。とりわけ、この言葉は同志社の建学の理念を表すものでありキリスト教的な意味を持っていますが、その視点からこの言葉の意味を考えてみたいと思います。

ご承知のように、入学式では、「同志社大学設立の旨意」が学生支援センター所長によって朗読されます。これは明治二十一年に発起人新島襄の名前で出されました。もともと新島を慕う愛弟子の徳富蘇峰によって草稿が認められ、新島が了承を与えた文書です。そこには、「良心を手腕に運用する」人材の育成、「一国の良心とも言うべき」人びとの育成が記され、それを熱望する新島の様子が活き活きと描かれています。「良心」をめぐる有名な言葉は、他にも、信頼する学生に新島が送った手紙などに見ることができます。それは、「良心の全身に充滿した」丈夫が現れ出るようにという表現です。同志社は良心教育という極だって良質で個性的な建学の理念を持っているのです。

よく比較されることですが、慶応義塾という学校の創立者である福沢諭吉は、実学を奨励しました。世の中を生き抜く術としてソロバンを身につけねばならないというわけですが。同志社と学生交換プログラムを持っている早稲田大学も学問の独立を標榜する素晴らしい理念を持っています。しかし私は、人間の内面世界に目を向け、人間としての尊厳に対して十分な注意を払おうとする同志社の建学の理念は、どのような学校、国立学校、私立学校のそれにもひけをとらない、第一級の教育理念であると考えています。同志社で学ぶ皆さんには、母校をぜひ誇りにしていただきたいと思います。

良心の語義

今日はその建学の理念の中軸となる「良心」という言葉を、キリスト教的視点を考慮しながら案内し、この良心的生き方に繋がる自治・自立・自由というもう一方の理念を振り返り、最後に新島はそれを具体的にどのような態度だと考えていたのかを見直したいと思います。ちなみに、キリスト教主義、自由主義の他に同志社は国際主義をもモットーにしています。これは、新島がその当時としては十年という例外的に長い期間アメリカに滞在し、また岩倉使節団の随員としてヨーロッパ各地を旅したこと、同志社の草創期には英語で授業がなされていたことなどをみれば明らかです。

さて、「良心」という言葉は英語ではconscienceコンシャンスです。これは、孟子などの漢籍にみられる言葉を採用して「良心」という日本語に翻訳されました。「良い心」です。しかし、このコンシャンスの原義には「良い心」という意味合いはありません。この言葉はconとシャンスscience、少し発音を変えるとサイエンスに分けられます。conは「共に」という意味です。コープとか、コーディネートとかいう場合に使う「共に」です。「サイエンス」は科学、要するに知るという意味です。元々はラテン語のコンスキエンチア由来します。語源から見るとコンシャンス、コンスキエンチアには直接に「良心」「良い心」といった意味はなく、「共に知る」とでも訳すことのできる内容をもっているのです。ちなみに新約聖書の言語であり、ラテン語と並んでヨーロッパのもう一つの古典語であるギリシア語では「シュンエイデーシス」と言います。シュンはシンフォニー（共に奏でる）、シンパシー（共感）シンボジウム（共なる宴）の「シン」に該当し、そういう場合の「共に」です。エイデーシスは「知る」という意味で、要するに、ラテン語とギリシア語は直訳すれば「共に知る」という同じ意味をもっています。

この概念は紀元前の古代ギリシア思想にすでにみることができますが、イエス・キリストと同時代に生きてローマ皇帝ネロに仕えたストア派の哲学者、セネカ（前四十年頃～後六五年）によれば、良心とは私たちの悪行や善行を監督する者、監察する者であり、私たちの内に住む聖なる精神です。この私たちの内に住む聖なる精神は自分自身のふるまいを観察しつつ、それが悪行であるのか善行であるのかを監視・監督しているのです。この聖なる精神は人間自身のもつ理性にも繋がりますから、言わば、自分自身が自分のふるまいを監督し、必要に応じてそれを裁判官のように裁くことになります。

最近、防犯のためにいたる所に監視カメラが設置されています。犯罪防止のためにそれを設置することはやむを得ない場合もあるでしょう。しかし、自分のふるまいが常にカメラに収められ、それを見ている誰かがいるのは、ちょっと落ち着かない、肩の凝る気分になってしまいます。同じように、自分の行動を常に監視・監督し、それが善なのか悪なのか評価を下していく良心は、常に見られているという自意識が脅迫観念となって迫ってくることもあるでしょう。

紀元前五世紀のアテネの文人でペロポネソス戦争後の僭主であったクリティアスは、宗教の理解、宗教の役割を論じたある文章を残しました。そこには、法律や宗教がこの世界に発生した事情を語る次のような物語が記されています。昔々、人間社会では無秩序が極まり、カオスの状態にあった。そこで、人はやりたい放題に好き勝手にふるまい、自分の欲求だけを充たそうとして、争いごとが絶えることはありませんでした。そこで、この困った事態を憂慮して賢人たちが集まって相談します。その結果、法律・ルールというものが考案されました。人間のふるまいに基準を設けて、許されるふるまいと許されないふるまいを弁別して、その間に境界を設け、もしすべきでないことがなされれば、法律に訴えて刑罰を科するのです。ところが、その秩序は長く続いたわけではありません。人びとは法律違反を犯して罰せられるのを避けますから、誰か人が見ているところ、自分のふるまいを白日の下に晒す状態では法律・ルールを守るようになりました。けれども、誰も見ていないところ、隠れたところでは相変わらず好き勝手なことをし続けていました。悪行は表立っては減ったけれども根絶しないのです。そこで賢人たちは再び集まって相談した結果、宗教なるものを思いつき、私たち人間をはるかに超えた存在である神々を造り出しました。人間を越えた存在であるこの神々は人が見えないところでも人びとが悪行に走らないように常に監視する役割を担っています。人間の住むこの世界の秩序を維持するには法律と宗教的徳徳が必要であることとなります。たとえ人が見ていなくとも、隠れたところでの誰にも見つからないふるまいであっても、どのような場合にも神は私を見て、監視しているのです。神はすべてをお見通しであるからです。

この話は、宗教がなぜ発生したのか、宗教はこの社会でどのような役割を果たしているのかを描いたもので、宗教を機能的に説明した古典的な理論です。私はキリスト教という宗教の世界に生きていますから、宗教というものは何かの役割を果たすために人間によって造られたのだというこの理論をにわかに入力することはできませんが、宗教のある側面を言い当てていると思います。さて、この物語が言いたいことは良心を監視役、法廷における裁き手になぞらえたセネカの思想と似ています。「良心」の役割は宗教の役割に似て人間の行動を監視し、善悪を弁別し、必要に応じて裁いて罰するものであるからです。それは悪を排して正義を実現するために有効な理屈であるかもしれませんが、しかし、どちらの場合も、お前のふるまいはそれで良かったのか、間違っていたのではないかと常に咎められるような神経質な気分を私たちの内に引き起こしかねないものになります。

キリスト教と良心

このような良心概念は、そのニュアンスを変容させながらキリスト教世界に入り込みました。ざっくりとこのキリスト教的な意味での良心を二つのポイントに絞って案内いたします。一つは「自分の中で対話する」ということ、もう一つは「人を超越したものと対話する」ということです。

まず、元々「良心」という言葉は「共に」「知る」という意味ですので、この「共に」ということを次のように楕円という図形に例えてみます。それは二つの焦点を持っています。「円」の中心は一つですが、「楕円」の焦点は二つです。良心とは、自分の心の世界を、楕円のように二つの焦点を持つと考えるあり方だと言うことができます。この二つの焦点は共に自分の心なのですが、一方の焦点は言わば生身の自分であり、自己中心的に自己の欲求を実現しようとしていく自分、生来の自己に具った衝動的なふるまいを遠慮なく発揮しようとする自分です。お腹が減ったら、それを表現して泣き続ける赤ちゃんなどはそうかもしれません。社会常識を自覚している大人も、広い意味では同じです。自分を自己中心的に発揮しようとする自分です。他方の焦点としての自分は、その生身の自分から少し距離を置いてその自分を見つめ、冷静にそれを振り返ろうとする自分です。この両者の関係は監視する・監視されるという関係ではなく、対話の関係です。この両者の自分が対話をするあり方が良心です。「自問自答」という表現がありますが、良心とはまさに自分の心の中で二つの自分が自問自答を重ねるあり方、二つの自分が対話をするあり方、自分の念頭にある事柄について両者に共に、一緒に考えつつ、あるべきことを表現しようとするあり方だと言えるのです。自分が今気がかりな事柄について、「どう対処すれば良いのだろうか、君はどう思うか」と一方の自分が問かける。また、自分のしてかしたふるまいについて、「お前はそれのこをした、けれどもそれは良かったのだろうか」と問かける自分があるあり方なのです。良心とは、心の中に二つの自分を設定して、そこで対話をするあり方なのです。ここには、セネカやクリティアスの例に見られるような監督者ではなく、言わば人間が自分の行動を決定していく際の相談相手としての自分を設定するあり方、互いに相談をしつつ自己自身の態度・ふるまいを決定していくあり方が表れています。

そしてこのことをさらに発展させたのが、二番目のポイントです。キリスト教はさらにこの対話の相手として、神という存在を考えます。生身の自分と対話をするもう一方の自分は、同時に自分たちの態度決定・判断のための尺度を求めて、神という人を越えた存在とも対話を試みる自分なのです。私たちは心の内で自問自答をします。その際に、たとえば、私たちは自分の親友を思い浮かべて、彼ならば、彼女ならばこんなときにはどのようにふるまうだろうかと想像してみます。それは、親友にとどまりません。たとえば、自分の親ならば

どうだろうか、家族の一員を思い浮かべて、さらにはお世話になった尊敬する学校の先生や先輩、あるいは世間体や社会常識と言われるものを思い起こして・・・それらを材料、尺度、参考にしつつ私たちは自分のふるまいを決定していくでしょう。ときには直接に相談に向いて意見を求めることもあるでしょう。私たちは成長の過程で、このようなやり方を通して健全な常識というものを身につけていくのです。キリスト教では、この、言わば相談相手となる存在に、自分を越えた、またこの社会とそこに通用している規範を超えた神と言われる存在を求めます。二つの自分のうち、生身の自分に距離を置いて見つめる自分、冷静に対処しようとする自分は、自分を超越した神とも対話をする自分です。同志社の創立者新島の有名な言葉に、「神の見えざる手」に私は導かれて生きてきたというものがありますが、この見えざる手に導かれようとするあり方がキリスト教の良心概念に含まれているのです。キリスト教の良心概念は、監視・監督する側と監視される側との関係から生じるのではなく、二人の自分が対話をするというあり方、対話をして智慧を出し合って解決を見いだそうとするあり方にその一つの特徴をもっています。そして同時に、この自分は自分やこの社会のしがらみを超越して、それらが提供する規範を超越した神と対話するなかで進み行くべき方向を定めていこうとするところにもう一つの特徴があるのです。一般にこの対話を重視するあり方を人格関係と表現します。人格的に生きるとはこの対話的關係のなかで自分のふるまいを確認しながら生きる姿勢のことです。

対話すること

旧約聖書の冒頭、創世記には天地創造の物語に引き続いて、アダムとエバがへびに誘惑されて墮落する話があります。神によって創造された被造物である人間はへびに誘惑されて、神から食べるなど命じられた掟を破り、園の中央にある木の果実を食べてしまい、楽園から追放されてしまいます。この物語の中で異変に気づいた神はアダムに問いかけると、アダムはエバに言われたからと答え、エバはへびにだまされたのだと責任をへびになすりつけます。これをリアリズムで捉えると理解できなくなります。エバはへびと話したのか、神は人間と話しているのか、そんなことはありません。でも子どものときに私たちは絵本や童話の中で野ネズミやぬいぐるみの熊であるとか、いろいろな動物と対話することを何の違和感も持たずに楽しみにしていました。ここに描かれている物語は神話ですが、同じようにファンタジーだと考えると分かりやすくなります。実を言うと、リアリズムで考えると荒唐無稽と思われるこの物語は、人間にとって本質的に大切なあり方を示しています。ここにはアダムとエバという人間同士の対話、へびと人間、神と人間が対話をするというあり方が描かれています。人は対話のなかで、人格的關係のなかで生きる存在、人は誰かと常に対話をし続ける存在なのです。

もっとも、その対話のなかで具体的に応答が返ってくるわけではないでしょう。イエフダ・アミハイというユダヤ人の詩人がいます。日本ではあまり知られていませんが、邦訳を含めて多くの国の言語にその詩集は翻訳されています。十年ほど前に同志社に来て講演しました。そのときに紹介された彼の詩を紹介します。現在もそうですが、中東パレスチナの地域は日常的に戦乱のなかにあります。悲惨で残酷な仕方でのいのちが奪われています。そしてアミハイさんは語ります。「哀れみ深い神。慈しみ深い神。もしそのような神がいなければ、哀れみは神の中だけでなく、世界にもいっぱいあふれていただろう。私は世界に哀れみなどないことを知っている。哀れみはこの世界から無くなってすべて神のところに集められたのだから」。別の詩です。「神は幼児を哀れまれる、慈しみを与えられる。でも児童には少なく、そしてもはや大人を哀れまれることはない。時に血を流しながら、焼く砂の上をはって行く大人には哀れみは与えられない」。パレスチナの現実を背景にしたとき、この詩のもつ重みを推測することができます。これらの詩には、神への懷疑の念があふれています。現実世界を見て、なぜこのような悲惨な状態をあなたは放置しているのかといった神への問いかけが沈黙しています。そしてこれもまた宗教信仰のあり方の一つです。アミハイさんはユダヤ教徒ですが、ユダヤ教とキリスト教に共通してみられる思考の枠組みは、対話性ということ、「問いかけで応答を求めるあり方」であると言うことができます。人間は対話のなかで生きる存在です。私たちの日常生活でも、たとえば老夫婦、どちらかの方が先立ってしまったときに、先立った方の写真に向かって、今日はこのようなことがありましたよというように話しかけ、対話をしていくということがしばしばあります。答えが直接に耳に入ってくるのではなくとも、何らかの応答を期待し、予想し、そのなかで自分のふるまいを見直しつつ自分というものを形づくっていくのです。

自治・自立

さて、この二番目の特徴、この世界を超越した神との対話を通して自分のふるまいを定めていこうとする態度は、新島が主張した自治・自立の精神、自由の精神を養うあり方でもあります。自由とはこの世のしがらみに束縛されないこと、この世に存在する何かの奴隷とはならないことです。私たちの多くはしばしばこれを自分流に解釈して、要するにすべては許されているのだ、法律に触れなければ何をしても構わないのさ、と考えたりします。そして、同志社の自由を単に強制や束縛がないことだと理解してこの大学は気楽にキャンパス生活を送れるところだと考えます。しかし、本来の自由はこのような次元で考えるべきことではありません。お腹が減ったなあと考えるとき、私たちは空腹の奴隷となります。ケーキが食べたいと思ったとき、ケーキが欲しいという気持ちに束縛されてしばらくの間、頭の中ではいろいろなケーキが思い浮かんで消えていくかもしれません。甘くておいしいケーキを食べるのは自分の自由とも言えますが、それはケーキに私たちが囚われていることでもあるのです。私たちはこのような仕方、日々の生活のなかでいろいろなものに囚われて生きています。新島が目指したものは、自分の人生を方向づける、その歩みを定めていく際に、この世界の中にあるものに囚われるのではなくそこから解放され、この世界、この人間社会を超えた存在たる神に問いかけ、そこに生きる指針を求めていく生き方なのです。新島は、常に神に語りかけ、神から何か応答を求めるという対話性のなかに生きた人でありました。

もちろんこの世界には、人が判断する際の尺度となるもろもろの考え方があります。幼いときは親の考えに頼り、その後友人同士でアドバイスをし合って成長していく。お金があれば、お金に依存して判断し、名誉を人の価値判断の土台にする。この世界の中にあるもろもろのものに依存しながら、それに頼りながらそれを参考にして態度決定をしつつ私たちは生きています。それは社会の常識に照らし合わせて生きる姿勢ですが、しかし新島はそれに留まらず、同時に神に問いかけ、そして応答を求める心の姿勢のなかで自分の判断を築き上げていこうとしたのです。もちろん、このような対話性は、人と人の対話のように直接に私たちの耳に聞こえるように応答があるわけではありません。自分で問いを出し、自分で悩み、言わばより高いものを心に留めつつ、自分で答えを出して、自分で判断していこうとする生き方です。この意味で、神とは、答えの事例を提供するようなマニュアル的存在ではありません。より高い次元の事々を意識することでもって自分を治めていく、そのような仕方自分を活かしていくのです。この良心的な生き方は、たとえば二人が同じ出来事に直面して何事かを決定しなければならぬときに、両者はいろいろ考えたあげく、違う結論を出すということがありうることを意味しています。人によって行く道が違うのです。土台には、良心的に生きるという姿勢があるけれども、決まった答えのなかで、決まったマニュアルのなかで生きていくではありません。良心的に生きるとは実は自らの足で立ち、自らを自分で治めることであり、その結果、人は多彩に生きていくことになります。それが同志社のあり方です。新島はこれを根本に据えて学校を創立しました。皆さんもご自分の夢と希望のなかで、ご自分自身の判断のなかで人生設計をしていただきたいと思うのです。

新島と良心

最後になりますが、この良心的な姿勢に基づいた新島は、具体的にはどのような生き方を目指したのかを伝えたいと思います。彼が好んで使った聖句、愛唱した聖句には新約聖書「使徒言行録」第二〇章の言葉があります。それは「受けるよりは与える方が幸いである」というイエスの言葉です。新島は一八九〇年に四十六歳で亡くなりましたが、アメリカから帰国後創立した同志社という学校を維持、発展させるために東奔西走した結果の出来事でした。おそらくこのオーバーワークのために、志半ばで神奈川県の大磯に客死し、京都東山の若王子に葬られました。葬列には三〇〇〇人ほどの人がとが連なつたと言われていますが、そこに幟（のぼり）がありました。これは徳富蘇峰が勝海舟に頼み、書いてもらった幟であり、「彼等は世より取らんとす、我等は世に与へんと欲す」と記されています。これらは新島のものの見方を極めて適切に表現しています。与えることのほうが、受けることよりも、取ることよりも幸いなのです。

この与えること、受けること、取ることに関連して、ギリシア語のアガペーとエロースという愛を意味する言葉を振り返ります。アガペーとは新約聖書に頻出する、キリスト教的な意味合いをもつ言葉です。エロースはそれとは対蹠的（たいしよてき）な意味をもっています。このエロースという言葉、古代ギリシアの哲学者プラトンは「シュンボジオン（饗宴）」という、そして副題に「愛（恋）について」と記された作品の中で興味深く案内しました。ここで言うエロースはエロチックといった言葉で想像するような意味とは違います。その昔、神々の長であるゼウスは、美の神アフロディテ誕生の際に神々を招いて宴を開きました。そこに招かれた神々のなかにポロスという男神がいました。ポロスは富裕、豊かさを象徴する神です。彼は祝宴のなかで大いに酒を飲み、庭に出て風に吹かれているうちに、芝生に横になって眠り込んでしまいます。その情景を見ていたのがペニアという女神です。ペニアは貧しさ、貧窮の神ですが、この宴に招待されなかったために、堀の外からうらやましそうに中を覗き込んでいました。そのときに、ポロスがふらふらと出てきて、眠ってしまいます。それを見たペニアは堀をよじのぼって中に入り込み、ポロスのそばに横たわって体を合わせ、そして生まれてきた神がエロースなのです。ローマ神話ではクービーデー（キューピッド）にあたります。このエロースという愛の神はアフロディテ誕生に関わって懐妊したことから、また親の血を受け継いだことから特徴ある性格を備えることになりました。つまり、アフロディテからは完全なもの、美しいものを追求する精神を、ポロスからは富裕、豊かなものを追い求める精神を、そしてペニアから豊かなものを追い求めるが常に弱乏している、常に欠乏感をもち決して充足できない精神を受け継いだのです。エロースとは永遠に、果てなく自分を豊かに、美しくしようとするあり方です。我々すべては、その意味でエロース的存在です。それはもちろん悪いことでも何でもありません。

それとは質を異にするのが聖書の中に頻出するアガペーという愛です。二〇世紀スウェーデンの神学者であったニグレンはエロースとアガペーを比較した有名な本を書いています。彼によれば、今説明したようにエロースは自ら自身を豊かにしていこうとするあり方であるが、その逆にアガペーは自分ではなく、自分の前にいる人、自分以外の人間を豊かにしようとする傾向をもちます。我々はエロース的存在である。しかし同時にアガペー的存在にもならなければならない。自分を豊かにするために受ける（学を身につける）、取る（吸収する）ことも大切です。しかし、受けるよりも与える存在、取るよりも世に与えようとすることを新島は願ったのでした。良心的な判断の尺度を持ち、そのなかで自分で判断し、自分の足で立ち、自分を治めていくあり方は、新島にとっては具体的には、世に与えるような、自分以外のものを豊かにしていこうとするような生き方として表れたのです。これが同志社の建学の理念となっています。私はこの同志社の建学の理念は世界で一番素晴らしいものだと思うのです。皆さんもこの学園での学生生活に誇りをもって、そのようなあり方を求めていただきたいのです。